

現代の生活不安と日蓮宗徒の姿勢

対談

新聞部 長 長谷川 正徳

現代宗教研究所長 中 濃 教 篤

生活不安「興起由来」

▲首相は、わが国が当面する最大の課題として物価・公害・エネルギーの諸問題をあげ、これらの課題を最優先に解決するため「反省すべきは率直に反省し、改めるべきは謙虚に改めるなど、思い切った発想の転換と強力な政策を推進していく」といつているが、これはむしろ当然のことであり、そのあとの物価政策にしても「正直者がバカをみるのとのないよう」、買い占めや売り惜しみをやめさせ、企業には便乗値上げや投機的行為に出ないよう強く自制を要請する——といっているが、現実には正直者がバカを見て、企業のエゴが大幅な値上げとなってまかり通っている実態に苦痛を強いられている国民にとって、なにをいませらと、政府の無策を責める気になっても無理はなからう……。▼

—「仏教タイムス」黙電。昭和四十九年一月二十六日付。

長谷川 現在の日本における生活不安は、異常な価格の値

上り、インフレでまことにひどいものがあるわけだ

が、この前に経済企画庁がまとめた消費者動向予測調査によると、家計のやりくりでなんらかの工夫をして生活

防衛している世帯が八五―八〇もあった、と朝日新聞

(一月二十五日付)にでていますね。

中 濃 トイレットペーパー・洗剤をはじめ、生活必需品に至るまでの高物価であるだけに、もう生活がどうに

もやっつけていけないという深刻な不安と危機感があると思えますね。いままでのところ、「正直者がバカをみている」と考えざるをえないでしょう。

長谷川 そう。けっきょく作られた物不足で消費者が不安を感じたあとに、ただ一つ確実に残ったものが、物価が高くなったということですね。そして便乗値上げ。じっさいは、大企業が物をもっていて、価格をつりあげ、もうけたということですね。

中濃 けっきょく、大企業だけがもうけた。大企業が買占め、売りおしみをし、政府がそれを放任したばかりかそれを擁護して、何の有効な政治をとらなかつた、ということは、国民が実感として感じとっていることではないか、と思うんですね。

長谷川 いま読売新聞をみていたら、石油関係の大手企業の利益は今までの三倍であるとでていましたよ。

中濃 史上空前！

長谷川 通産省がおさえようとしたが、それに石油業界は反発して、もっと上げるとまでいっている始末ですよ。

いくら資本主義体制だって商道德とか企業の社会的責任とがあつていいと思うんだが、それがなくなつたというのはどういふわけなんだろうか。しかも数十日間の備蓄があつてなお値上げする。これでは政治不信になりますよ。

中濃 だから、田中首相も、福田大蔵大臣も、「事態は

深刻だ」「物価の高騰は狂乱状態だ」といわざるをえない状態ということでしょう。しかし、その状態をもたらした原因については、石油危機にともなつた物価の上昇だということに重点をおいているわけですね。もちろん、その背景に石油危機があつたことは事実ですけれども、石油だから火をつけたわけではないが、それ以前から物価は上つていたという状況があるわけですよ。どんなに要求しても、物価はさがらない、その政治不信が革新政党の伸び、自民党支持の減少、そして田中内閣支持率の減少という形であらわれていた。しかも、大企業が物を買占め、売りおしみしているのに、物を買いだめしているからと、その責任を消費者に転嫁してきたわけでしょう。たとえ消費者でも、エゴで買ひしめていいとは思いませんが、2DKやそんなに広くない部屋にトイレトベーパーを買ひだめしたつて、その量はたかがしれていますよ。それなのに、物価の値上りや「物不足」を国民のせいにするのはおかしい。そこには、大きな政治的背景があると考えなければいけないのではないかと、日蓮門下としても、その真実をつかんで対処するには、相当腹をくくつた気持が必要でしょう。

長谷川 悪徳でボロもうけする大企業、不正を許し、不安

と責任を国民にしわよせしている「正に背き悪に帰す」政治、ここをわれわれはどうとらえるか、ということでしょうね。

中 濃 この状況は、公害の問題の上にさらにのしかかっているわけですが、いまいわれたことと同時に思想上の問題がおこっていますね。それは何かというと、「科学文明はゆきづまった。これからは精神文明でなければならぬ。だから科学文明を否定すべきだ」という意見です。たしかに一面をみれば、この意見はわかりません。しかし、それを一般化、抽象化して、だから精神文明として宗教が必要だ、と短絡してしまふとゆきすぎのようには思いません。科学文明を否定するという根拠は、公害が生命と環境を破壊し、いずれは人類の滅亡にまで至る可能性を現実を示したというところにあると考えられるわけですが、それともう一面大切なことは、資本主義の体制下において、公害によって自然と人命の破壊がなされ、さらに生活不安がひきおこされているということです。そればかりでなく、機械万能の中で、人間が主体的意志で働くよりも、機械が人間を奴隷化する。そこで人間性が無視されてしまふ。ここから機械文明のゆきづまりを感じるといふことがあつて、脱サラリーマンの傾向やいわゆる終末論が「お先まっくら」という形ででてくる。これらはいずれも、資本主義体制からでてく

る問題としてとらえるべきだといえるんじゃないだろうかと思ひます。これは、むしろ単純な概観ですが、この当りから問題をひきだすことが必要でしょうね。

長谷川 機械文明はダメだから、といつてすぐ飛躍して精神文明を、というのはいけないうるあなたの意見に私も同感ですが、こんにちの機械文明の根は深いです。いわゆるテクノロジにたいする盲目的な「信仰」があつて、それにまいったく無批判であるところにも病根はあるでしょうね。少くとも宗教者であれば、科学技術文明をこえた思想をもたなければならぬ、科学技術を人間のしもべにすることはむづかしい問題ではあるにしても、あらたに考え直していくことは不可欠でしょう。人間存在よりも理性を優先させ、科学時代を生みだした、そのゆきづまりにぶつかっているいまこそ、この再検討は大切でしょうね。

中 濃 ただ、そこでね、人間はがんらい働かなければ生きられないということがありますね。問題は個人的にそうするといふことではない。こんにちの機械文明が、高度に発達した資本主義のしくみ、という社会体制ときりはなしえないといふことでしょうね。

生死をみつめて

立正安国の原点から

△旅客来つて嘆いて曰く、「近年より近日に至るまで、天・変・地・天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招く輩、既に大半を超え、之を悲しまざる族、敢て一人も法し。

然る間、或は「利劍即是」の文を専らにして、西土教主の名を唱へ、或は「衆病悉除」の願を恃んで。東方如来の経を誦し、或は「病即消滅、不老不死」の詞を仰いで、法華真実の妙文を崇め、或は「七難即滅、七福即生」の句を信じて、百座百講の儀を調べ、有は秘密真言の教に因つて、五瓶の水を灑ぎ、有は坐禅入定の儀を全うして、空觀の月を澄まし、若しくは七鬼神の号を書して、千門に押し、若しくは五大力の形を図して、万戸に懸け、若しくは天神地祇を拝して、四角四塚の祭祀を企て、若しくは万民百姓哀みて、国主国宰の徳政を行ふ。

然りと雖も、唯肝胆を摧くのみにして、弥飢疫逼る。乞客目に溢れ、死人眼に満てり。屍を臥して觀と爲し、尸を並べて橋と作す。觀れば夫れ、二離壁を合せ、五緯珠を連ぬ。三宝世に在し、百王未だ窮まらずして、此の世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。是れ何たる禍に依り、是れ何たる誤に由るや」。

主人曰く、「独り此の事を愁へて胸臆に憤排す。客来つて共に嘆く、屢談話を致さん。夫れ出家して道に入るは、法に依つて仏を期する也。而るに今、神術も協はず、仏威も驗無し、具に当世の体を觀るに、愚にして後世の疑を發す。然れば則ち、円覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深くす。情微管を傾け、聊か經文を披きたるに、世皆正に背

き、人悉く悪に帰す。故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還らず。是を以て、魔来り鬼来り、災起り難起る。言はずんばある可からず。恐れずんばある可らず。▽

——『立正安国論』冒頭の一節——

長谷川 そこでね。宗祖のお考えが、「人の寿命は無常な

り、出ずる息をまたず」といわれ、「されば臨終のことを習ふてのちに他事を習ふべし」といわれたところにまず出発点があつたこと、この「生死」をみつめられたことをテクノロジ―社会のなかでもう一度問い直すことが必要でしよう。

中 濃 そこが基本でしようね。死という根本問題を生と関連ずけて考えてゆく、というのが仏教の、また日蓮聖人の考え方であるわけであつて、そこから「法華を識る者は世法を得べき」というお葉も出てくると思うんですが、生と死をきりはなしてしまふ見方が多いんじゃないか。

長谷川 そう。「中高卒者は金の卵」など一方ではいい、片方では老人を使ひものにならないといつてスクラップみたいなにする、そんな生命の軽視、生きることへの尊貴性がない風潮がありますよ。死を考えるなかで生きる、生きぬくなかでたがいに愛しあうという人間関係——こんなことをいうとセンチメンタルに聞えるが——がなげりや

ね。農業をバラまいて、食べものがとれさえすれば、生きものは死んでもよいところに生命軽視の端的なあらわれがみられますね。

中 濃 生に即して死を考えることによつて死の重み、尊厳性がわかり、それが即、生きる尊厳性を考えるということになるわけでしょうね。生きていることを大事に思えば、当然老後も大切にすることになるのですが、老人問題や社会福祉がとりあげられ、*「福祉元年」*なんていわれてもじつさいは逆になっているわけですね。そういつていいかどうかわかりませんが、社会主義国で老人が野たれ死んだという話はあまり聞かない。もちろん立派な施設があつても、さびしいとかいう精神的なもののみたされているかどうか、という問題はあるでしょうし、そこがわれわれの分野にかかわってくることもありますが、老人や医療にたいすることはやられていくということもわれわれは考えていくべきでしょうね。

長谷川 生と死は不可分だもんなあ。苦しむものに同苦す

る。そこに日蓮聖人的実践が生まれるんですよ。

中 濃 日蓮聖人は、代表的には「立正安国論」において現実問題と法華経信仰とを高度な立場から把握され、行動をされていますが、相当社会の動きをよくみられていたことは疑いないところでしょう。そこで、「立正安国論」の冒頭で、客のことばとして「旅客来りて嘆いて云く」とはじまっているわけで、そもそも法華経信仰とは、といった形で書きはじめられていない。旅客の嘆きからはじめて、最後に法華経信仰に帰させる書き方をされている。これは、北条執権にだしたからということもあるでしょうが、この日蓮聖人の姿勢をわれわれは現実的に見直していくべきだと思いますよ。

長谷川 私ほまえに説教の中で公害を話したとき、やはり「立正安国論」の言葉から引用したことがあります。水俣病・イタイイタイ病などの公害問題は、生死にかかわる社会的犯罪であり、国民全体の嘆きである。宗祖は「彼の万祈を修せんよりは、一凶を禁ぜんには如かず」といわれ、「謗法の施を許さず」と示されているということのべ、だから公害企業を支持しないという発想、公害の発生を許さないという考え方を強調していかねばならないといいましたがね。

中 濃 日蓮門下であれば、人々の嘆きや悲しみをともに嘆く立場にたつべきでしょう。そして、嘆きをもとにす

るだけでなく「胸臆に憤懣す」という憤りの心をおこすまでにはいたらないとね。

長谷川 いまの世の中で、私が一番大切だと思うことがあるんですが、数字をあげておどかす、という考え方があるということですよ。「天声人語」（朝日新聞・昭和四十九年一月三十日付）にこんなことが書いてありました。「数字は何ものも容赦せぬ冷酷な現実であり、曖昧（あいまい）や感傷をもたぬ生々しい象徴」という織田作之助の西鶴新論の中の言葉を引用しましてね、このあとこう書いています。

「数字をうまく読む人がいる。数の圧力で攻め立てられると、感傷的な反発などとても立ち向かえない。田中首相の『数字』は、強力な武器として使われる。政府が出す白書のたぐいも、武器は数字であり、数字である限り説得力をもつ」といっています。そして、「『数で見るとかぎり』では、見えないこともたくさんあるということである」といい、「卸売物価指数が、対前年の約三〇％増といわれても、日常的な値上りの実感とはほど遠い」と書いているんですね。この、数の論理は質の問題を問題にしないという風潮を生みだした。つまり、数万能の論理は、非宗教的なんですね。GNPがすぐ何位だという。出版物が何十万部売れたからいい本だという、選挙では何十万票とって、当選すりやそれでよい、というよ

うに、すべての分野で価値判断の基準が数であるわけでは、私たちはそれに対して質の論理で足りこんでいかなきゃいけないと思うですよ。事実、最近GNPのまやかしさはでていきますし、そこで「GNPくたばれ」というプラカードもあらわれる。人間的な要素がないんだ。こういうことは、宗教者にとって枝葉末節のことなのであるうか。タイへ行っても、田中首相は数字を並べてしゃべっているしね。それに対して、東南アジアの人々は「日本人は社会正義がない」「欲と金ばかりだ」「田中首相という人は、金持ちらしいが中味のない人だ」というふうに、人間的要素で反論しています。エコノミックアニマルにたいして、人間らしいものをうちだすべきじゃないか。私は「天声人語」をよんでこう思いました。

中 濃 いまのことは大切だと思いますね。けれども、逆に数字はすべていけないものと決めつけてしまうと問題はでてくると思うのですが。例えば教団の施策をつくるのに実態調査からでてくる数字はある程度尊重しなきゃいけないでしょう。ただ、いまいわれたことで、いちばんはつきりしていることは、数字のだし方に操作が多いということ。GNPしかり、石油が入ってくる税関のトータルと大蔵省のトータルがくいちがっているということが国会で論議されているようにね。それについて、政府はいろいろ弁解はしているが、どっかに操作が

あり、自分に都合のよい数のみあげる傾向が強くているといえるでしょうね。そこで、いまの「天声人語」も書かれたと思う。GNPが世界何位なんていわれて、われわれもやっぱり日本は、などという気もした、気にさせられた。ところがじっさいをみれば、何がGNP世界第何位だ、ということになる。つまり、数字の魔術ですよ。それにゴマ化されない見方をもたないかね。

長谷川 数字でゴマ化するのが常トウ手段になってきたね。たしかに。

中 濃 このまえ、アジア仏教徒平和会議でスリランカ（セイロン）へ行ったとき、スリランカで日本人が殺されたという話を聞いた。「仏教国で殺人はおかしい」といったら向うの人のいうことには、「たしかにその通りだ。仏教国で殺人はよくない」といったあとで、「しかしあなた方も宗教者として日本の指導者の方々だからいうけれども、この国で、日本の商社員がいったい何をしてくているか、を知ってほしい。みんな日本の商社員のひどいしうちに憎しみをもっている」というんです。そのごうまん不遜な態度をみんな怒り、憎んでいるですよ。日本はまた日本帝国主義のように侵略するのではなく、そんな不信任をみんな持っているわけです。タイやインドネシアでも反日デモがおさえられないのも、政府の高官も同じように感じているからで、もしそれをお

さえれば、自分たちの政府も倒れてしまいますからぬ。こういうことは、宗教者としては、じゅうぶん責任を感じとっておくべきことでしょう。政治についてどうこうということも基本ですが、人間のあり方からいって考えねばならない。だいたい一つは人種差別でしよ、日本人は優秀で、東南アジアの人々をこき使ってもよいという態度がある。もう一つは、もうければ何をしてもよい、というやり方ですよ。こんなことで世界の、とくにアジアの国民との友好が本当に保たれていけるのか。田中首相は否定はしているが、かつてのアジアへ侵略した責任を反省していないということでしょうね。

長谷川 田中首相が国会で、「長い合邦の歴史の中でいまでも朝鮮民族の心の中に植えつけられておるものは、日本からノリの栽培を持ってきてわれわれを教えてくれた」と韓国の人からいわれた、とかその「合邦の歴史」で「いまも支持されている義務教育制度を普及したことだ」といって問題になっていますね。

中 濃 韓国からさえ抗議の声がでている。

長谷川 「合邦の歴史」という言葉そのものが朝鮮を植民地にした卑民化の歴史でしょ。植民地政策の反省がまるでないんだな。あわてて真意が理解されていなかった、と弁明しているが、頭の中にしみこんでいるから、つい本音がでてきたということでしょう。

中 濃 韓国がそういつている、とか東南アジアへ行つて、向うの人から修身はどこにいつてしまったかといわれた、とか「いわれた」という形をとっているけれどもそれはとりも直さず修身を復活したいということでしょう。かつての義務教育がよかったということは天皇制下で、植民地政策をやった教育がよかった、ということになる。修身を復活したいということは、かつての修身教育とは教育勅語ですからね。根は深いですよ。

長谷川 そのもとで、日蓮聖人の遺文もおマンダラも削除されたんだからね。一九四五年に日本が戦争で敗けたという経験はムダだったのかなあ、少しも変わっていない。

中 濃 いや、変わりつつある、というべきでしょう。

長谷川 長いものには巻かれろぐにたいして決然と対決したところに、日蓮聖人がいたことを改めて考えるべきだ、ということだろうね。

現実への深い認識を

教化活動を大衆の中へ

▲日本人は長い間の封建制度の下に、「長いものにはまかれる」という思想的奴隷の態度が養はれて来ました。真理の故に真理を愛し畏しむといふ思想は蔽われて来たのです。

併し何時までもさうであつてはいけませんまい。鎌倉時代の日蓮は、真理のために真理を愛し、真理によって国を愛し、真理の敵に向つて強く「否」と言ふことの出来た人であります。▽

矢内原忠雄「日蓮」(『余の尊敬する人物』所収)

長谷川 このあいだ、名古屋の光耀寺に布教にいった。名古屋ではいま騒音・振動などに悩む東海道新幹線の名古屋市沿線市民が「生活環境が著しく破壊される」として公害さしとめと損害賠償訴訟をおこす動きが行われているんですが、その新幹線公害の話し合ひでは本堂がイッパイになるというんだな。私のお説教ではせいぜい十五人から二十人ぐらいしかこない。

中 濃 そこは非常に重要なとこですね。

長谷川 それがね。こんどくる坊さんは、新幹線公害問題にとりくんでいる長谷川(正浩)弁護士のおヤジさんだ、というわけで公害問題の委員長が来ていたそうなん

だ。私は知らなかったんですがね。私は、公害問題をさかんにとりあげてお説教したんです。そのお説教のあとでね、その委員長のいうことには、「へえー、お寺さんでもああいう話をするんですか、きょうこの頃のお寺さんはだいぶすすみましたね」といったというんだな。私はそれをあとで聞いて、何ともいいうがなかった。つまり、僧侶は、現実のことにふれない、やっけないという意識が他の人にはもたれているということなんだな。だから、現実を悩んでいる人はあまり寺へこないもんな。教師自らが現実社会のことに自覚を高めていかなければいけないんじゃないか。それには、社会科学という

ものも学ばなければね。

中濃 たしかに現実には複雑ですし、目前のことしかみれないという面があると思うんですが、われわれ教師がただ現実を傍観してすむことではないでしょう。むしろ現実について檀信徒の方が切実な不安を感じていて、僧侶ほど感じないで右往左往していることがあると思うんですね。この生活不安がいったいどんなしくみからだれがおこしたのか、という苦しみの根源をつかむことがどうしても大切でしょう。それがないので、どうしたらよいかわけがわからなくという面もありますね。

長谷川 日蓮宗ばかりでなく、一般的に教団人というのは、同族的な閉鎖集団を形成しているのです。現実から、広く社会とのかかわりあいでも遊離している、とたしか第六回中央教化研究会議でのべたことがあります。戦時中は、「立正報国」といい、戦後は民主主義へ順応する、現実から遊離しているから矛盾なく順応しちやうという面があるけれども、反面では宗教的決断というものが無いともいえるんだな。やっぱり、歴史や時代にふれない信仰や教団ばかりしているからいけないと思えますよ。だから、信仰や教団から歴史と時代に対決したり、きりむすんでいくことがない。はじめから資本主義の論理を知らない。したがって目前におきている民衆の苦しみ、そのなかで自分も苦しんでいる問題を本質的に

つかみえない。それが僧侶集団を形成している。僧侶は自覚的に近代をこえ、現代に生きているか、という反省がでてくると思うのです。現代資本主義の論理をしっかりと学んだ上で、しかも人間として生きていくということですよ。それを私は、僧侶自ら現代人とならねばならぬといっているのです。その生きぬく上で経験する矛盾の中で、教説をたてないと、なんだ坊主のお説教か、ということでも聞いてもくれないし、話す僧侶自身も何か自信がもてないという気がするんですよ。

中濃 たしかにそうだと思いますね。現実的には、寺や僧侶は、なかなか動きにくいといういろいろな制約がありますね。ありますが、せめて政治や社会の動きやしくみを考える、信仰にてらして現実をみる、という姿勢はもつべきでしょう。

長谷川 この現実の生活不安に対応できない日蓮宗が、もし世の中が変わったら、それに対応できるのか、という問題があります。今までだと矛盾なくすぐ対応しちやうことになる。批判と対決する姿勢、現実には信仰者の立場でとりくむことがはたしてどの程度あるだろうか。

中濃 いや、それが無いと教団は滅びてしまうとさえいえますよ。たとえ形はのこってもね。だから、外からだけかよんで話を聞くのもけっこうですが、布教師会なら布教師会で、例えば物価高についてどう考えるか、

といったテーマで話しあうとか、こういうことをやらねばならないんじゃないか。

長谷川 そうそう。教化研究会議のいいところはそこにあると思う。じつさいにぶつかっている問題にたいして、どう布教教化したらよいか、という現実にかかえている問題を考えるんだから、みんな真剣だよ。私が話をしているときも、ピンピン感じられるものがあるもの。

中 濃 現状では、寺をみれば総代、世話人との関係で考えばねばならない点も一面ありますね。それらの人は、地域の有力者であり、政治的には保守的な人が少なくない。そして、そういった人々ほど教団への発言力をもっている傾向がありますから、現実の生活に悩んでいる人が教団とかかわりあいをもちにくい。こういう人々の声こそ、教団に反映されていくシステムというものをちゃんととらないといけないですね。

長谷川 都会はともかく、田舎にいけばみんな貧しいですよ。教師もその中で一生懸命いろいろやっているんだが、その声を吸収する、すいあげる力がないんだなあ。中 濃 そうですよ。そういう所で悩みながら布教している教師の声がどのくらい反映しているかというところ、ほとんどがき消されているでしょう。そういう意味で、教化研究会議が非常に大切になってくると思いますね。

長谷川 教化研究会議は、この現実の問題と信仰・布教と

を結びあわせて、現場の教師の声を反映させているシステムとして大事にしたいですね。燃えあがっているもの。

中 濃 だから、この教研会議が、現宗研と教務部がやっているんだ、という受けとめ方だけでなく、この方式で未端の教師の感じ方、考え方を吸収していかなければならないんだ、という全宗的受けとめ方をする必要はあるんじゃないか。すでに遅きに失したくらいだと思いますよ。教研会議にでてくる意見は、非常に率直だし、これをくみ上げれば教団の施策の上できわめて大切なものがあるし、この面をふまえてこそ統一信仰もほんものになると思いますね。上からおろしていくというのは、教団のやり方ではありますが、それを本当に受けとめていく力はどこにあるのか、また施策を受けとめてもらうためには、どういう配慮をすればいいか、がないとやっても成果はあまりないということをくり返すことになるのではないかと、そう思いますよ。

長谷川 〃統一〃ということが、何か形だけのことに考えられているけれども、本当は宗門全体が、教師、檀信徒が立場や考えや地域のちがいをこえて、仏祖の願業のために手をつなぐ、一致協力するところにあるんですからね。とくにいまいわれた現場での統一した教化活動、信行活動はもっとも大切ですね。

中 濃 統一信行が、信行学を中心に、いままでの「家」の信仰から個人の信仰へ、檀家を信者にする、という方向をもってやっていこうとするのは、その限りでは正しいと思うんですが、檀信徒をふくむ国民のぶつかっている問題、悩みというものにこたえていく姿勢がないと、信仰による連帯感もでてこないし、うわすべりで表面をなでただけで、やったやった、成果があがったということになってしまうと問題がありますね。

長谷川 統一信行を「信行必携」を通じてやっていくことは一応できると思う。しかし、檀信徒の悩みに真正面から向きあって、現実の問題をらつし来って、その問題の根源にふれ、しかも檀信徒がすすんでこれを実践的に解決していく方向にいくのには、現状ではむずかしい。しかし、やっていかねばならない課題であり、これからの方向であるという点では当然でしょうね。教師の質的向上が必要だということもあるし、葬祭その他以外に檀信徒と接触が少なかった教師が、教化活動面でつながりをもっていくことを通じて、その方向がでてくるという段階でしょう。でも、教化面でふれあう機会は、統一信行によってたしかにできましたね。まず統一と連帯の一步をふみだしたということでしょう。

中 濃 だから、本宗として、統一信行と教研会議を車の両輪としながら、この社会状況に信仰的にも、現実的に

も対処できる教化活動をどう展開していくか、いまその時点に立っているといえるでしょうね。

△昭和四十九年一月三十一日に対談▽

(編集文責・石川康明)

